

市制施行後に市役所発行「芦屋名勝」絵はがきの袋

かくして、都市近郊にして風光明媚な芦屋は、大阪神戸に勃興した実業家の注目する住宅地となりました。これらの需要を受け、村内では一気に



芦屋名所・芦屋遊園地の一部(絵はがき・精道村時代の風景)

今さら言うまでもないことですが、大阪・神戸のほぼ中間に位置する本市は、通勤に便利な上に、海と山が近接するという絶好のロケーションに恵まれています。ところが、日常的に利用されている鉄道について、その成り立ちをご存じでしょうか？

芦屋市制70周年記念特集

芦屋市誕生の基盤

一足飛びに“村から市”となった背景とは

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432

交通の発達

昭和十五年十一月十日、本市は全国で百七十三番目の市として、精道村から一足飛びに芦屋市へと移行することになりました。この背景には、どうい理由があったのでしょうか。そこには、明治三十八年の阪神電鉄の開通・駅舎の設置をはじめとした交通手段の発達や、精道村の実施した芦屋川の改修、またその改修で生まれた土地を宅地造成し売却するなどの精道村民の努力する姿が見え隠れしていました。本年、芦屋市制施行七十周年を迎えるにあたり、精道村から芦屋市へと移行していく背景について、また交通の発達とともに実施された宅地開発などをもとに、芦屋の都市景観の成り立ちについて考えてみたいと思います。

〈文責・明尾圭造〉



芦屋川上流の堤(絵はがき・精道村時代の風景)



芦屋公会堂(絵はがき・現市民センター付近)



現在の芦屋川河口(城山を望む)

芦屋川の河川改修と宅地開発

宅地開発が進み、人口増加を迎えることとなりました。精道村の人口推移によると、例えば鉄道駅舎がなかった明治三十七年には戸数六百三十九戸・人口三千四百五十二人であったのに対し、各社出揃った大正十年では戸数二千四百戸・人口一万二千二百六十六人(芦屋市

史)となっており、戸数人口ともにほぼ四倍になるうとする勢いであったことが分ります。それは、国鉄芦屋駅の乗降客の推移(『芦屋市史』)に如実に反映されています。たとえば大正二年開設当初の利用客数は一日平均八十人であったのに対し、大正十年には千四百一十一人と、十倍以上の伸び率になっていることから想像できるのです。

もともと、川幅が百二十mから二百m(河口付近)あった芦屋川は、河川の氾濫を繰り返す暴れ川でもあり、その改修は村の悲願でもありました。併せて河川敷であった両サイドを埋め立てることにより、村所有の公有地が三万二千坪誕生しました。精道村はこれら公有地を宅地化し、競売していくことで、その後の財政基盤を確立していききました。

増え続ける人口に対して精道村役場がとった離れ業、それが芦屋川河川改修に伴う宅地化とその販売です。まず、阪神芦屋駅付近に実業家の邸宅街が形成され、国鉄芦屋駅と阪急芦屋川駅の開設を受けて芦屋川を挟んだ山手の両サイドに邸宅建設が進捗しました。これには、旧来より居住する地元住民の宅地造成の努力があったことを、忘れてはならないと思います。そして、精道村による耕地整理事

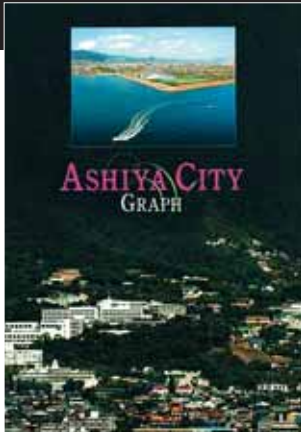
業と芦屋川の河川改修が、その後の芦屋市誕生の基盤となったことを述べたいと思います。精道村の財政(『芦屋市史』)を見ますと、大正四年までの歳入・歳出は二万円であったのに対して、同五年には歳出三十二万九千六百四十五円に対し、歳入三十四万七千四百五十二円と、一挙に十五倍以上に膨れ上がっています。具体的には芦屋川の河川改修費に十五万四千五百六十五円を投入したことに起因しています。

その後も、人口増加と村内の宅地化は急速に進んでいくのですが、昭和十五年の芦屋市施行に先駆けて、鉄道開発の整備と芦屋川の河川改修が果たした役割の大きさに、思いを巡らしていただければ幸いです。



日本一といわれた精道村役場(絵はがき・現在の市役所北側広場に建っていました)

「芦屋シティグラフ(ASHIYA CITY GRAPH)」好評発売中！



市では、「芦屋シティグラフ」(A4判・52ページ/全カラー刷り)を発行・発売しています。芦屋の自然や歴史、芦屋ゆかりの芸術・文学・文化 - 。それらに触れつつ散歩を楽しめるコースの紹介、行政の動きや統計、また市内の医療機関一覧(地図)など盛りだくさんの情報を、写真170点のほかイラストや地図とともにわかりやすく掲載しています。ご活用ください。■発売場所 市役所行政情報コーナー・ラポルテ市民サービスコーナー ■定価 300円



問い合わせ 広報課 ☎38-2006